情報通信審議会情報通信技術分科会
研究開発・標準化戦略委員会
標準化戦略ワーキンググループ（第２回）議事概要

１　日　時 平成１９年１０月１日（月）　１４時００分～１６時００分

２　場　所 三田共用会議所４階　第四特別会議室

３　出席者（敬称略）

構成員
相澤清晴（主任）、江﨑浩、成井良久（江﨑正 代理）、上野貴弘、岡進、勝部泰弘、加藤隆、加藤泰久、川西素春、喜安拓、北地西峰、古賀正章、佐藤孝平、玉井克哉、中西廉、花輪誠、小林康宏（原崎秀信 代理）、日比慶一、平松幸男、藤咲友宏、星克明、丹治久（宮島義昭 代理）、村上和弘、山下孚

事務局
田中宏（通信規格課長）、荻原直彦（同課標準化推進官）、増子喬紀（同課標準推進係長）、山﨑浩史（同課標準推進係）

４　議事
（１）構成員からのプレゼンテーション
江﨑構成員及び平松構成員より、資料 標－２－１及び資料　標－２－２についてそれぞれプレゼンが行われた。
主な質疑については以下のとおり。

【相互運用について】
・標準化を実運用にもっていくためには、その間の調整の部分が大変重要であるとの話だが、ＷＩＤＥやＳＩＰ等の標準化においては、実運用を含めて、一体となって議論が行われているのか。
→費用がかかるということと、情報通信システム（インターネット）が既にインフラになっているという理由から、現場では新しい技術を導入したがらないのが現状である。そのような中では、標準化と実運用を結びつけるという点で、テストベット等の検証の場が重要となってくると思う。また、知的財産についても、実際にテストベットで検証を行うことを通じて、初めて必要となるパテントが見つかるものであり、そのような点でも有効だと思う。さらに、実運用をテストベット等で検証することによって、市場に適したスペックが明らかとなる。
→実運用と標準化を結びつけるテストベットの部分は、直接利益を生むところではないので企業がお金を出しにくいところだが、重要な部分であり、そのような環境を上手につくることが必要である。このような部分については、国がある程度関与し、支援をすることが必要ではないか。

・運用コミュニティをどう巻き込むかが重要であるとのことだが、日本でもオペレーターが入ってテストベット等を実施しているがうまくいっていないのが現状である。これはなぜか。
→標準化の担当者に運用の経験がある人が少ないというのが理由として挙げられる。標準化の担当者がテストベット等を通じて、運用の担当者と一緒に作業することによって、現場を見て理解することが大切であり、そのようなプロセスをつくるのも戦略として重要だと思う。

【大学における標準化活動の関与について】

・大学における標準化に対する意識はどうか。
→大学は中立性が高いので、ベンダーやオペレーターに対して、リーダーシップを発揮してマネージメントするということは、大学の意味として大きいと思う。また、異なる分野の標準化の人たちが話をするという場としても大学は非常にやり易い場だと考えている。
→諸外国に比べて、日本の大学の社会に対する影響力が弱いと思う。大学の研究が実際の産業に関わってくることが大事であり、大学側も企業が何を欲しいか考える必要がある。もっと大学と企業の連携があるべきであると思っている。

【独占禁止法について】
・独占禁止法が知的財産権よりも強く機能する場合があり、知財だけでなく独占禁止法にも注意が必要かと思う。

（２）アンケート結果について
事務局より、資料 標－２－３に基づき、アンケートのとりまとめ結果についての説明があった。

（３）各作業班の検討状況について
各検討項目のリーダーより、進捗状況等の説明があり、その後フリーディスカッションが行われた。
主な質疑については以下のとおり。

【エキスパートの選定について】
・エキスパートの選定について、学位取得者が望ましいとあるが、標準化をやっている人は学位が取りにくいのが現状である。もし、そのようにするならば学位をとりやすいシステムを作る必要があるのではないかと思う。標準化をやっている人たちが情報の共有が出来る学会やフォーラム等の場と、標準化をやる人のキャリアパスをきちんと確保する必要が施策としては必要ではないかと思う。
→ＩＴＵアカデミーというものが来年の５月に開催を予定しており、ペーパーを募集しているので、このアカデミーとの連携も考えていただければどうかと思う。

【テストベットについて】
・アンケート結果の中にテストベット構築や運用を結び付ける仕組み等の記述があるが、標準化の成果をマーケットに実際に出していく流れをサポートする機能をどこかに盛り込んでいくことができないか。
→テストベットについては、前回資料の実施体制図において、産学官の実証実験という形で記述した。国としても予算等確保するつもりなので、どのように実施するかについては、このＷＧや作業グループにおいてご検討頂ければと思う。

【議論の進め方について】
・標準化や知的財産は企業の事業戦略と密接に関わってくる部分でもあるので、競争する分野と協力する分野とすみ分けて議論できればと思う。

・日本として、ＩＣＴ分野の標準化にどう取組んでいくのかという基本的な考え方や戦略について共通認識があると各ＳＷＧにおいても議論しやすいのではないかと思う。
→前回のＷＧにおいても本活動がアップストリームに偏っているというご意見を頂いているところ。全体的な枠組みとなるような話については、このＷＧの会合で議論頂ければと思う。
→ＳＷＧでは戦術的な議論が行われるので、ＷＧのこの場では、全体の戦略を議論することが必要なのかもしれない。

・検討項目が１０個あるが、この見直しについてはどうか。数が少ない方が議論しやす

いと思うが。
→本ＷＧでは、ＩＣＴ国際競争力懇談会で提案された１０項目をまずはご議論いただくこととなっている。議論の過程で必要に応じて、検討項目の統合を行ったり、作業グループの共同開催を行って頂くのはいいと思う。

【標準化の国際会議の誘致について】
・標準化を担当している人がシニア化している。若手育成は１つの大きな課題であり、ＷＧ全体で議論していってもいいと思う。またアジア戦略についても、ＷＧ全体で検討していくことが必要である。ヨーロッパに主導権を持っていかれている標準化について、どうアジアに主導権をもってくるかという戦略があってもいいと思う。国際会議については例えば年に１度くらいは日本に誘致してきてもいいと思う。
→会議の開催場所は大きなファクターとなる。ただ、誘致する際にはサポートが重要となってくると思うので、ここでの議論が支援に繋がるようになればいいと思う。
→ＩＴＵに関して言えば、日本に誘致した回数は増えてきている。ただ、ＩＴＵ－Ｔの場合は開催資金を民間から集めなくてはならないのが現状である。ＩＴＵ－Ｒでは相当分が国の予算から支出されているので、ＩＴＵ－Ｔについてももっと国の予算がつけばいいと思う。
→企業からもお金を出しやすくすることが大切であり、そうでないと誘致しにくい。
→例えば、ＩＵＴ－ＲのＷＰ８Ｆのように議論が活発だと企業もサポートしてくれる。また本部ではなく、地域での開催をすると、地域の声がいろいろと聞けるのでいいという意見もある。

・ＩＴＵについて言えば、アジアで日本は一番遠く不利である。逆に、日本で開催すれば、ヨーロッパは遠いので、ヨーロッパからの参加者が少なくなり、意見が通りやすくなるという考え方もある。
→アジアの人たちは、いろいろな理由からアメリカに行きにくいのが現状である。日本にきてもらって、日本のファンになってもらうことが大切である。
→今ＡＳＴＡＰがタイのチェンマイにて開催されており、そこで日本より標準化ギャップについての提案を行う予定である。また、来年の春には、ＡＳＴＡＰを日本に招致する予定であり日本においてアジアの人たちと連携をとる取組みを進めている。

（４）その他
次回ワーキンググループの日程等については、１０月末を目処に開催を予定しており、詳細については主任と相談の上別途連絡することとなった。

[配付資料]
資料 標－２－１　At large な 標準化活動
資料 標－２－２　国際競争力強化のための標準化・知財戦略について
資料 標－２－３　ICT標準化強化戦略、知的財産強化戦略に関するアンケート結果
参考資料１　作業グループの検討目標
参考資料２　標準化戦略ワーキンググループ構成員名簿

以上